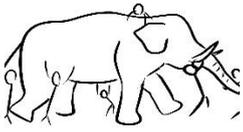


郡盲象を評す

インド発祥の寓話で、形は違えど世界中に広まっている物語です。

大臣と一緒にいた王様が、十人の目の見えない人々を呼びました。そして、それぞれに象を触らせて、これは何かを聞いたのです。すると、象の鼻を触った人は輿の轆（牛車などの車引きがつかむ棒）、牙を杵、耳を箕（穀物の選別に使う農具）、頭を鼎（三本足の器）、腹を壁、背中を丘、前足を臼、後ろ足を樹、膝を柱、尾を蛇とそれぞれに答えました。すると、大臣は目の見えない人々をあざけり笑ったのです。王様はそれをたしなめます。そして、人は物の一部しか見えず、それに固執すると真実を見誤ることを伝え、仏法の見方が必要であると諭したのです。



我々が見ていることは、あるものの一部分でしかありません。一部分しか見えていないのにわかったような顔をして他を貶めてはならないのです。わからないことに気づかされ、他の見えていない世界を知らされると世界は広がります。

そんなに怒りな
さんな、みんな
初心者だったん
だから 者存私

こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

仮

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどま

りたるためしなし。世中にある人と栖と、又かくのごとし。

『方丈記』の冒頭です。古文で習われた方も多いのではないでしょうか。川の水は、常に流れていて留まることがないことを、無常の譬えとして用いています。

世の中すべて無常で常に動いているのですが、「仮」に、この世界は成り立っていると仏教は世界を見ていくのです。

仏教は、我々が見ている物、私自身も含めてあくまで「仮」に出来ていると考えるのです。水は常にうごめいているけれども、仮に「川」と設定するのです。

また、この世界は私の認識で「仮」にできているともいえます。

私の認識でできているから、同じ味噌汁でも人によって濃いと感じたり薄いと感ずるのです。人によって認識が違うから、同じことをしてもストレスを感じる人がいたり、発散になったりする人もするのです。



ということ、認識を変えていくことで「仮」のこの世界は変わるのです。ここがなかなか難しく、だからこそ阿弥陀仏は立ち上がられたのです。

